Four Preludes for Guitar

Based on Japanese Traditional Pentatonic Scale

Composed by Nakanishi Seiichi

Op. 2

Prelude No.1　E-major (JTPS)

Prelude No.2　E-minor (JTPS)

Prelude No.3　D-major (JTPS)

Prelude No.4　D-minor (JTPS)

Play, as you like.

February,　2002
Published by Ongakukobo
Kyoto, Japan
© Nakanishi Seiichi

（解説）

『ギターの為の前奏曲』（全 4 曲）はすべて日本の伝統的な音階（日本旋法）により成っています。私が用いている旋法は古代～古謡におけるものと思われます。この辺については今後研究していきたいと思っています。

日本旋法と言うと四七抜音階を連想される方があるかも知れませんが，この音階は明治時代に西洋音楽の影響を受けてできた音階で，純粋な日本旋法と呼べませんが，「近代日本旋法」と呼んでも良いかも知れません。

「前奏曲第 1 番」は私の分類で言う「E 核音陽旋法」でできています。F♯の音が出てこないのにどうして♯（ト長調～ホ短調）の記号が付くのか不思議に思われるかも知れません。この辺についてはいずれ明らかにしたいと思っています。私の『弦楽の為の組曲』（作品０）を聴いていただければご理解いただけるかも知れません。この曲を西洋人が聴くと，ホ短調と思うかも知れません。

「前奏曲第 2 番」は主に「E 核音陰旋法」でできています。しかし「E 核音陽旋法」と俗に「都節」（ミ・ファ・ラ・シ・ド）呼ばれる旋法も取り入れています。一つの試行です。陽旋法に比べると陰旋法は和声的処理が行い易いですが，西洋音楽の影響を受けた人間は処理を誤る可能性が大です。勿論，私もその一人です。私の場合，日本旋法においては「和音」と呼ばず，「響き」～「響音」と呼んでいます。

「前奏曲第 3 番」は「D 核音陽旋法」でできています。この作品では，私としては初めての，同一核音における転調を試みました。西洋音楽の技法としては当たり前のことでしょうが，日本旋法においては重要な試みであったと思っています。実際，日本の古い曲で転調している曲を聴かれたことは，まず無いはずです。

「前奏曲第 4 番」は「D 核音陰旋法」でできています。自分で言うのも変ですが，この曲は結構気に入っています。「響音」の部分については，他にもっと良い方法があるかも知れません。自分なりの「響き」を追求していただいても結構です。良いのが見つかった場合は教えて下さい。

全体を通じて･･･コンピューターを使って作曲を行っています。ギター曲を作る場合は，2～３声部を用いています。曲が出来てから，ギター譜に改編しています。表現の為の記号等はコンピューターへの指示の為のものです。記譜法も同様で，一般的なギター譜の記述と異なる場合もあります。演奏に当たっては，それらに囚われず，自由に行って下さい。

運指については付けていません。自分で考えて下さい。私は運指や表現は演奏者の分担であると考えています。

ご感想等いただければ幸いです。YFA23170@nifty.com

私の全作品については，ホームページで公開していますので，興味ある方は聴いて下さい。
http://homepage3.nifty.com/jtps/

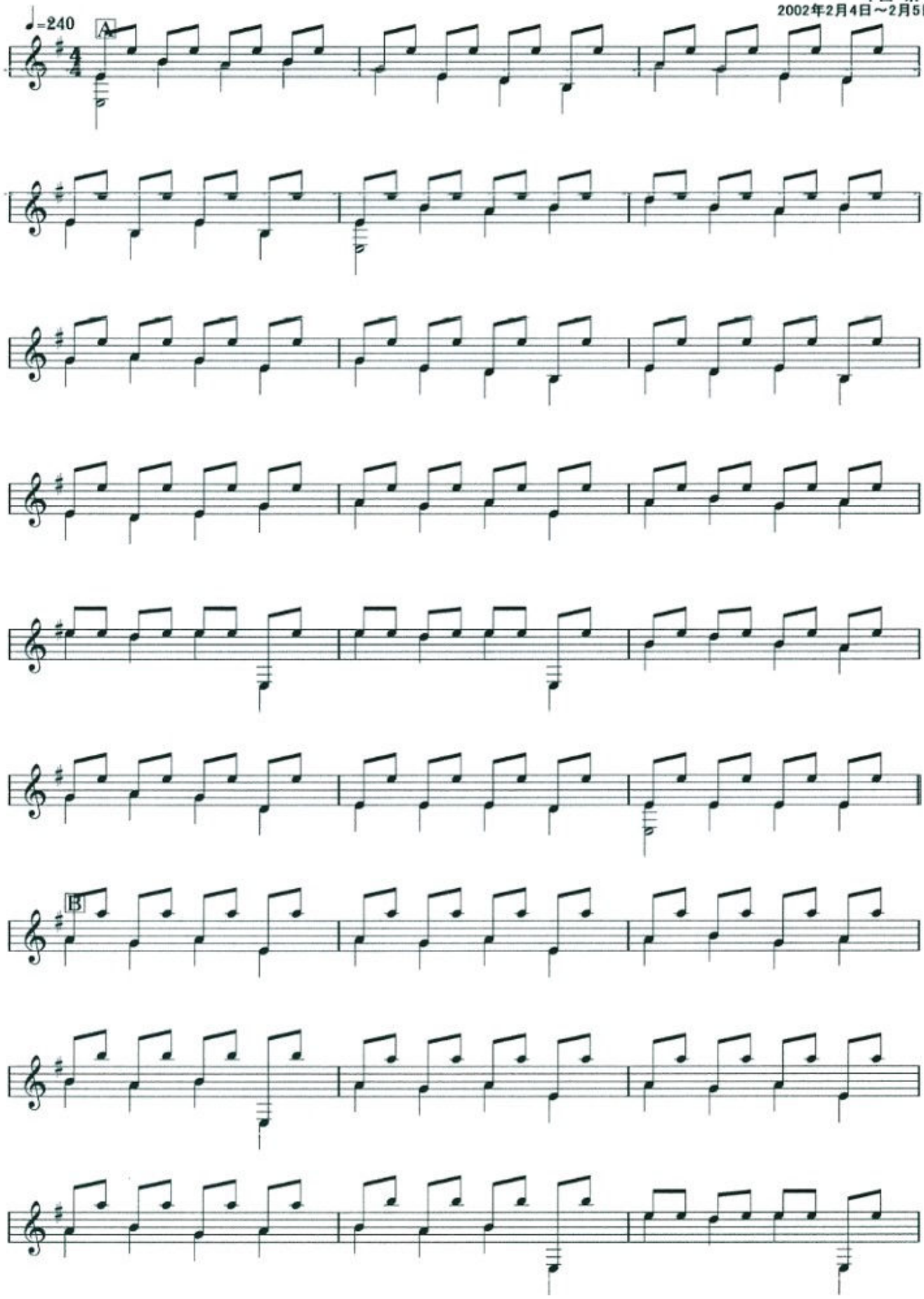
２００２年２月

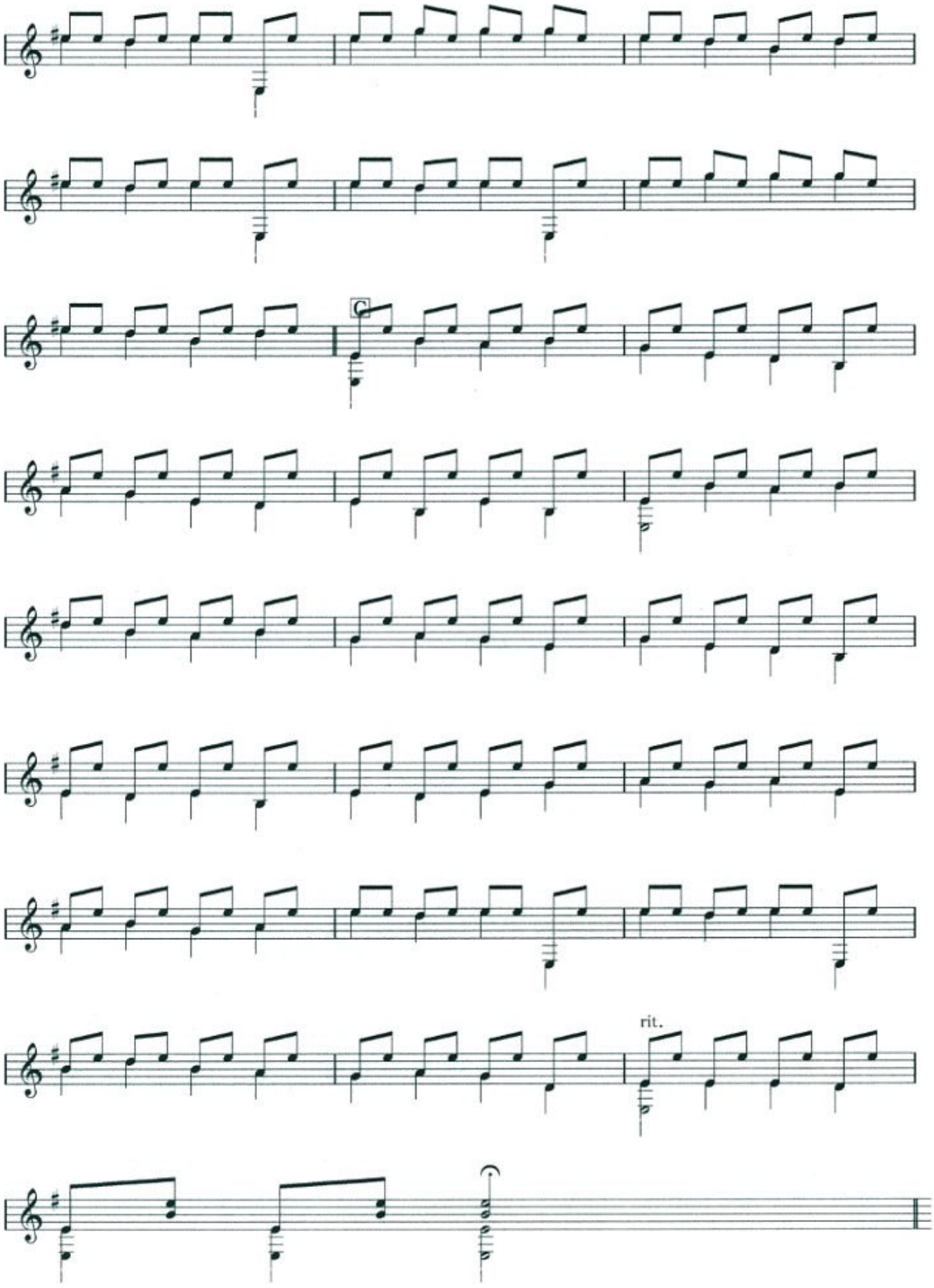
中西　清一

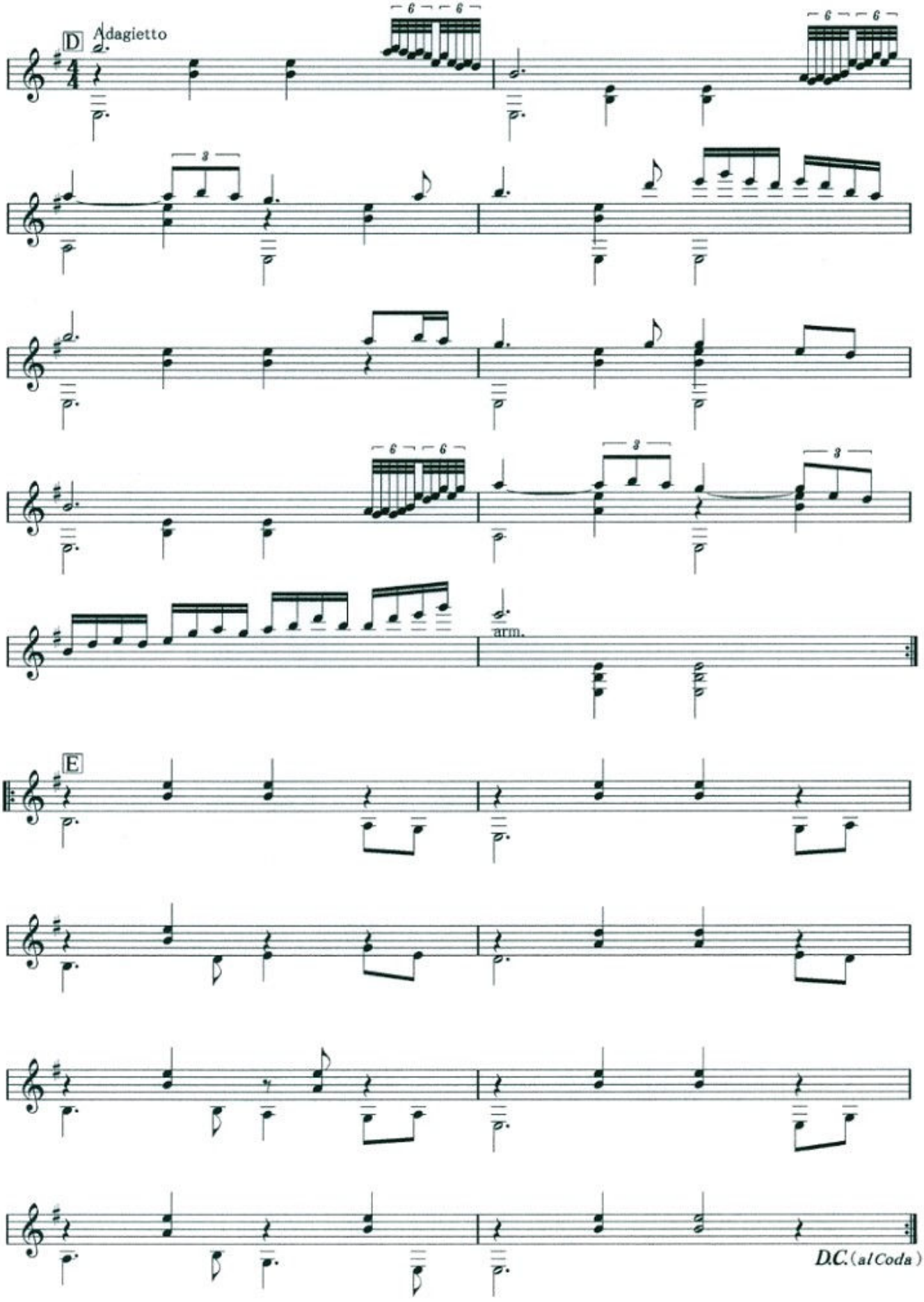
Prelude No.1

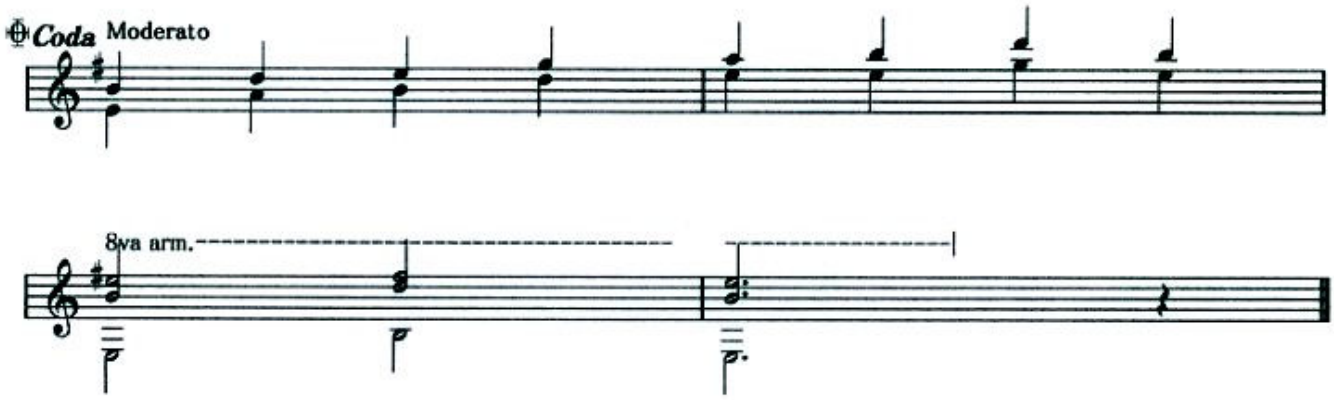
中西　清一

2002年2月4日～2月5日



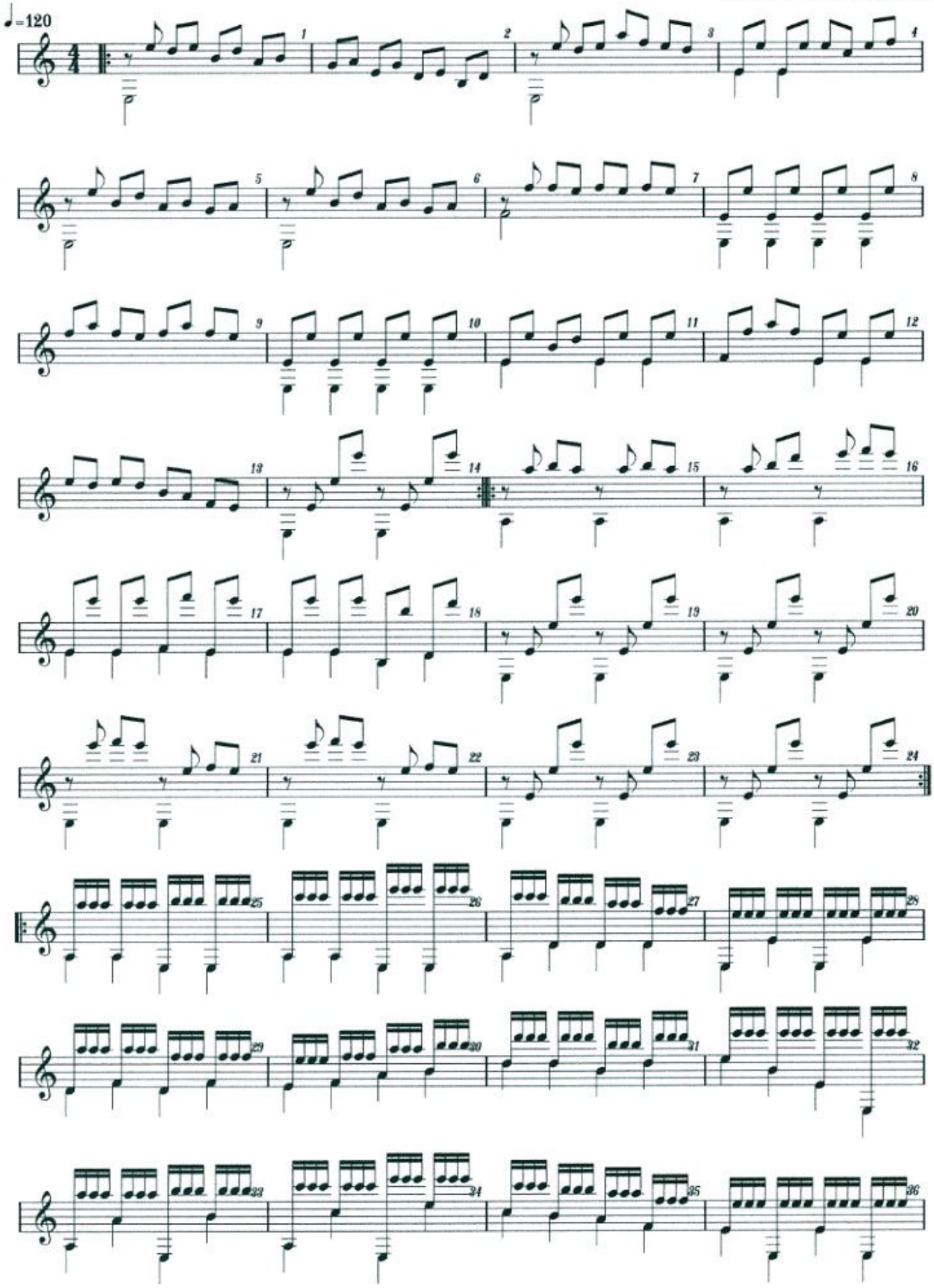

C
rit.

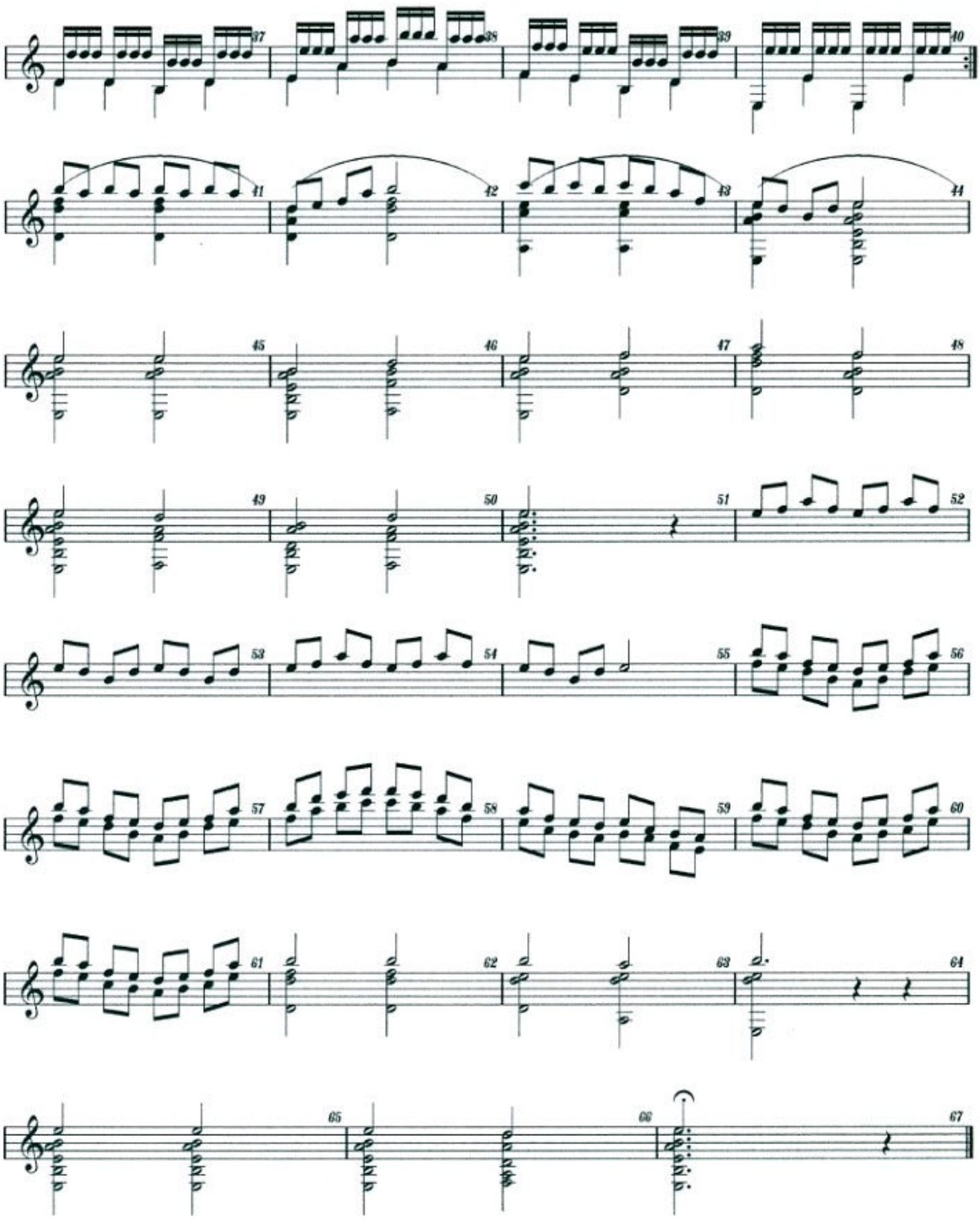

D
Adagietto
arm.
E
D.C.(al Coda)


Coda
Moderato
8va arm.

Prelude No.2

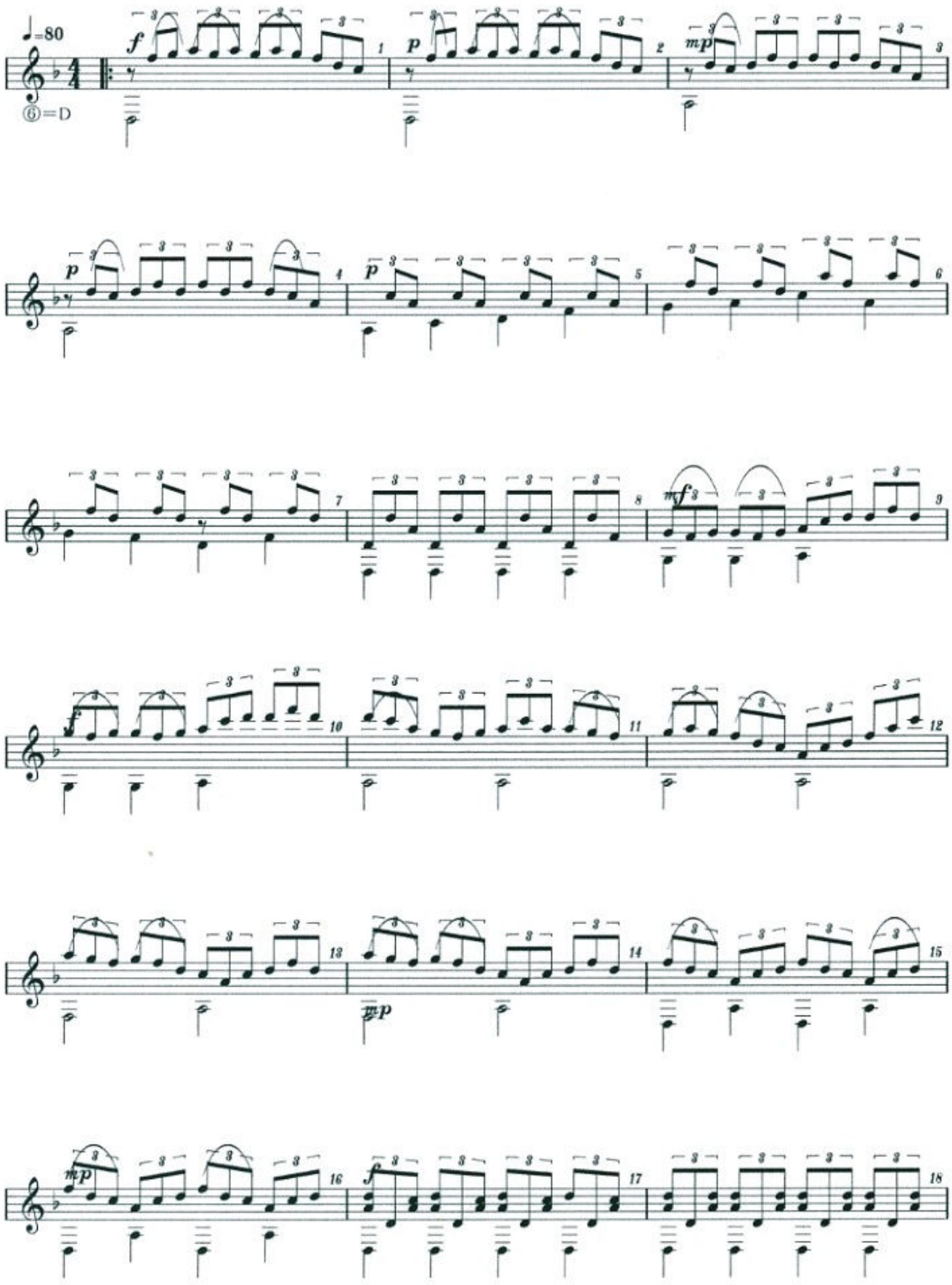
中西清一作曲（2002年2月10日）

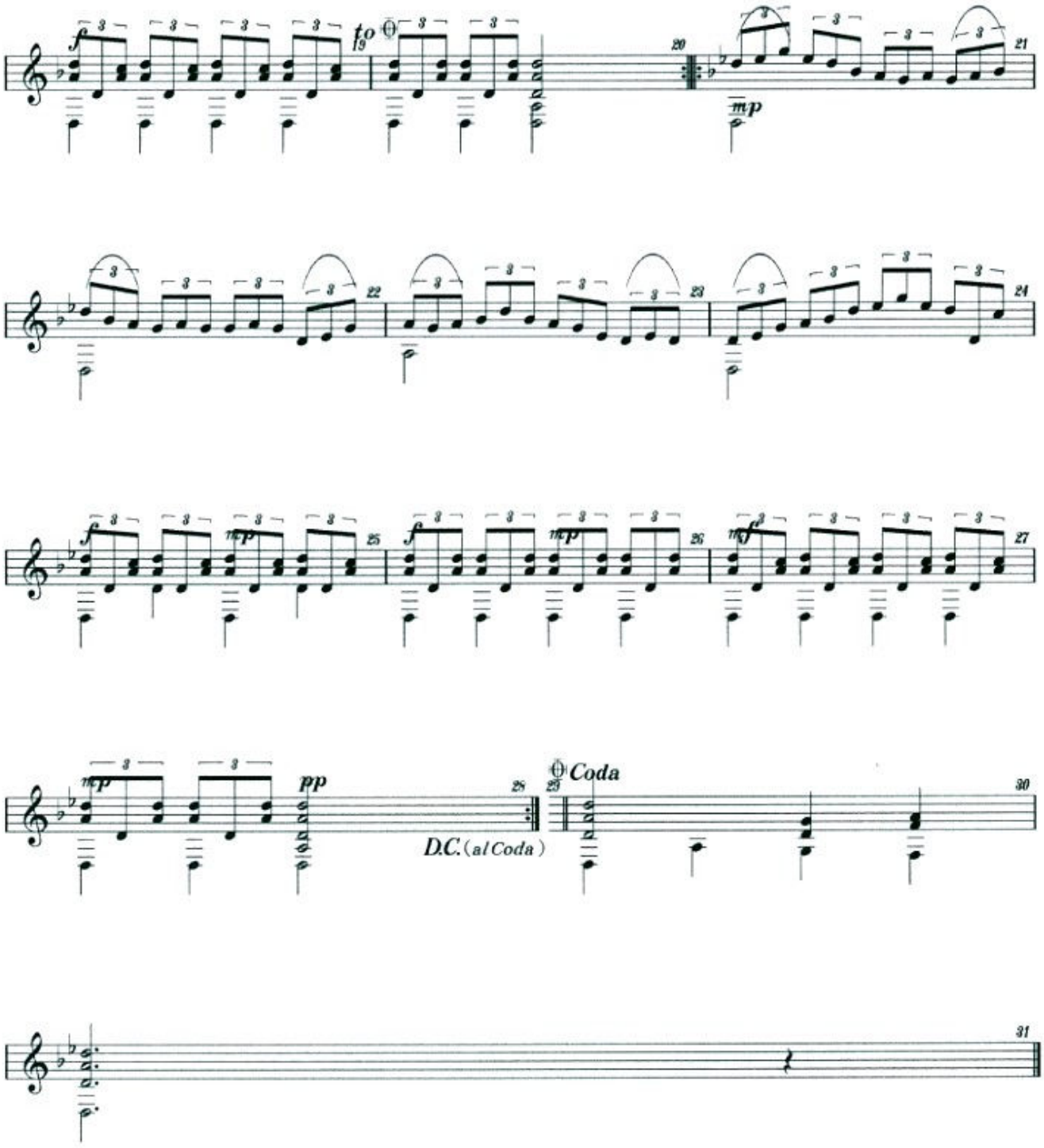




Prelude No.3

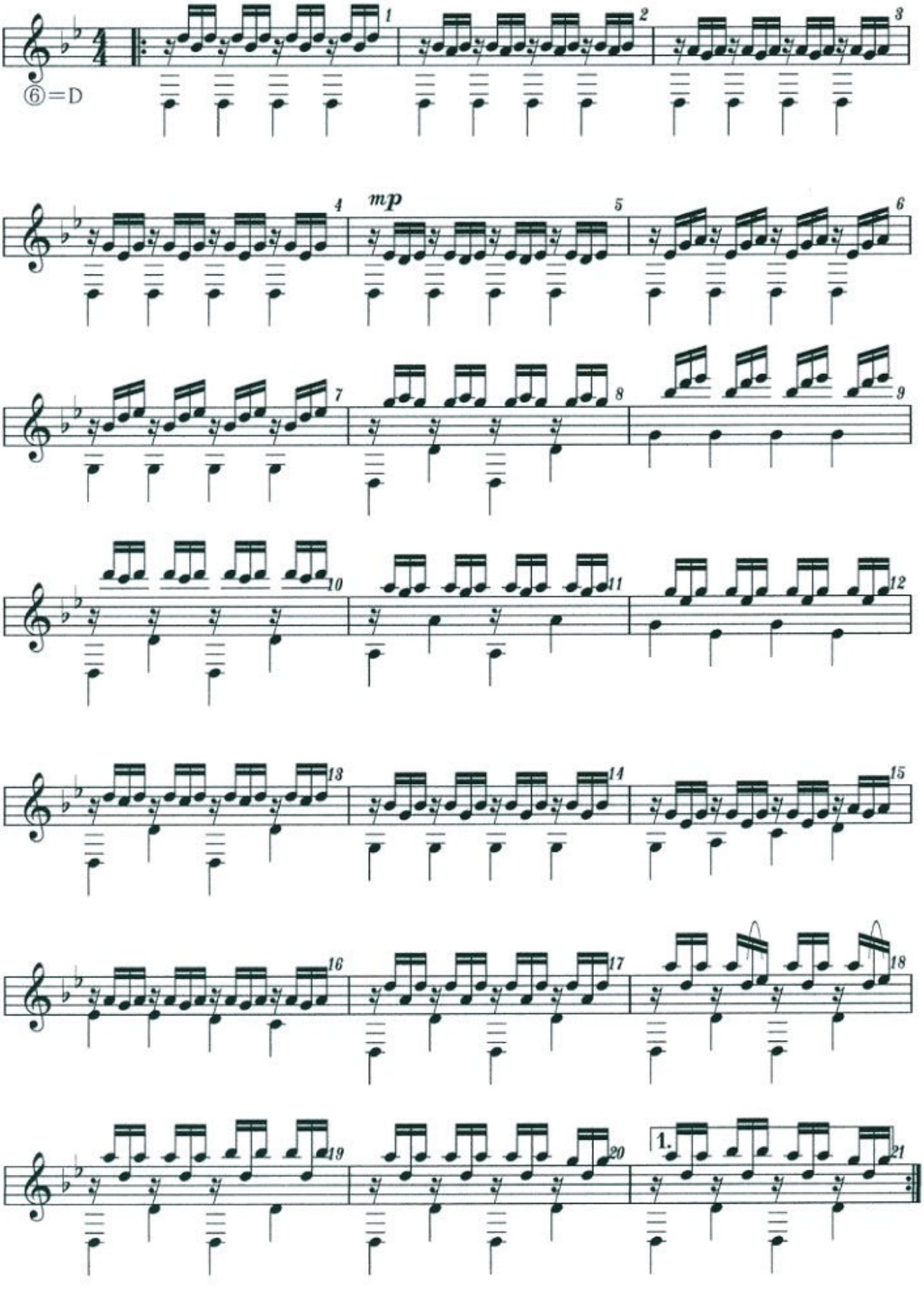
中西　清一（2002年2月11日～2月12日作曲）

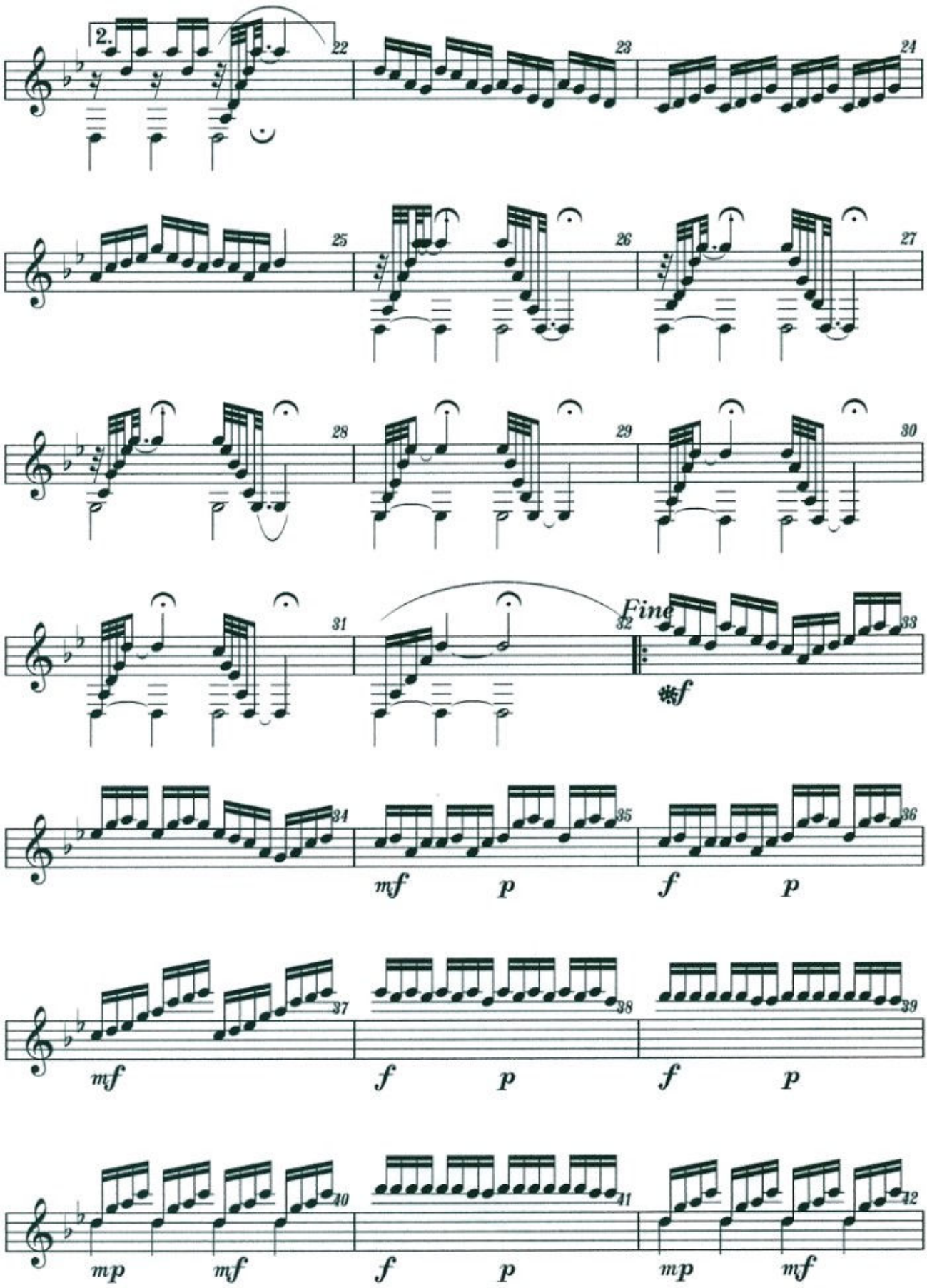


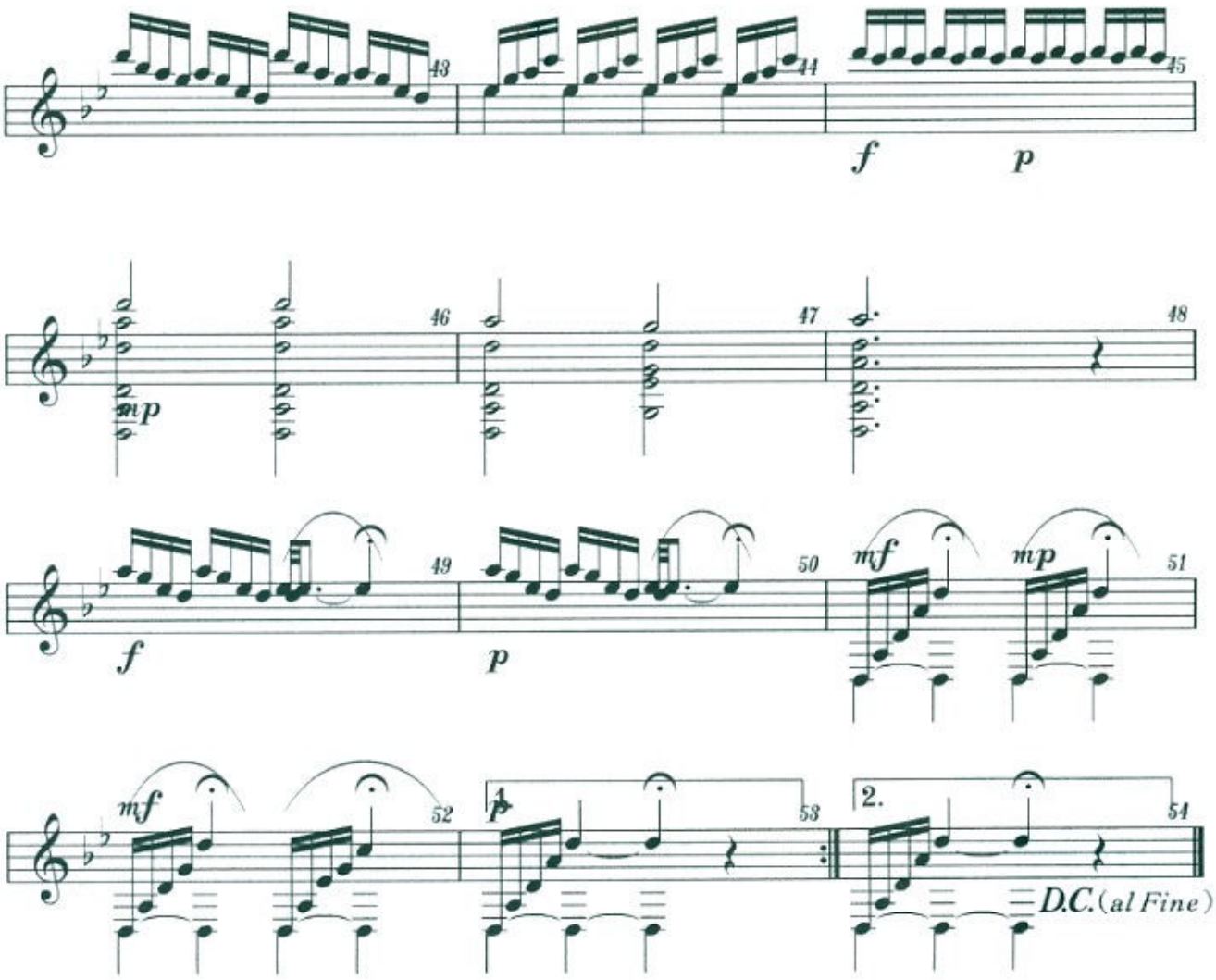

f
to
19
20
mp
21
22
23
24
mp
25
f
mp
26
mf
27
mp
pp
28
D.C.(al Coda)
29
Coda
30
31

Prelude No.4

中西清一　作曲
2002年2月16日～17日




2.
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
Fine
33
*f
34
35
36
mf
p
f
p
37
38
39
mf
f
p
f
p
40
41
42
mp
mf
f
p
mp
mf


43
44
45
f
p
46
47
48
mp
49
50
51
f
p
mf
mp
52
53
54
mf
p
2.
D.C.(al Fine)